

2020 年度活動報告 学部授業：日本語 II（水）（西宮上ヶ原）

山本 真理（関西学院大学日本語教育センター）

浅津 嘉之（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

1 年生を対象に、週 1 コマ実施された。全 12 クラスのうち、対面 4 クラス、Zoom を使った同時双方向型オンライン 8 クラスであった。全クラス統一シラバス・スケジュールで実施した。到達目標は、1) アカデミックなレポートで使われる表現を理解・使用すること、2) 自分なりの論点を立て議論を展開すること、3) 自分で集めた資料を適切に引用し、説得力をもって主張を記述すること、であった。なお、対面クラスでは学生自身のパソコン持参を推奨し、学生への説明・同意の上で 4 クラスとも配布物は全て電子データで配布することとした。

2. 授業内容

授業前半は『日本の教育格差¹⁾』を批判的に読む活動を、後半は読解活動を踏まえて自ら問いを立て 3000 字程度のレポートを書くこととした。昨年度まで読解の理解確認として授業内での一斉クイズを実施していたが、活動時間を十分確保するために LMS (LUNA) 上で何度でも挑戦できる事前課題に変更した。また、日本語 I に引き続きレポートへの教師フィードバックは最小限に留め、レポート推敲は LMS の掲示板を使ったピア・レスポンス活動を中心に進めた。

3. 成果と今後の課題

クイズから事前課題への変更は、学生が事前に繰り返しテキストに目を通してくる効果をもたらした。一方で、自動採点で適切にフィードバックされない問題もあり、課題も残った。また、学生と教員のやり取りの機会の確保を目的として、コミュニケーションカード²⁾を取り入れた。特に学生の様子が見えにくいオンラインクラスや、安心して授業に参加する環境が重要なピア・レスポンス活動のために有効だと考えた。実施した結果、担当教師からは効果的だったという声がある一方で、十分に機能しなかったという声もあった。今後要因を考えた上で継続すべきか検討したい。

¹⁾ 橋本俊詔（2010）『日本の教育格差』岩波書店。

²⁾ 「大福帳」（向後 2006）を参考にし、学生が授業後に授業の感想やその日の気づきを書くこととした。教師は必ず返事を書き、必要に応じて次の授業全体で共有することとした。学生はコメントを考えながら授業に参加するため、結果的に「講義内容をよく聞く効果がある」（鈴木 2016, p. 94）とされている。本授業では議論やピア・レスポンス活動のふりかえりにも用い、提出点を成績に加えた。